

対馬における ESD の教育実践 ～佐須奈小中学校と仁田小学校の事例から～

松本和花子

1. はじめに

2018 年度の対馬アクションリサーチ合宿の 3 日目に、対馬市立佐須奈小中学校と仁田小学でヒアリング調査を行なった。対馬では、総合的な学習の時間に対馬を知るための「ふるさと学習」が行われている。その学習内容は、ESD の親和性が非常に高い。このレポートでは、お話を伺った佐須奈小中学校と仁田小学校での ESD の実践についてまとめたい。

2. 文部科学省が提示する ESD の学習指導要領

2008 年 3 月に幼稚園教育要領及び小学校・中学校の学習指導要領が、2009 年 3 月には高等学校の学習指導要領が公示され、持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれた。

3. 佐須奈小中学校での ESD の実践

佐須奈小中学校では、長田誠校長を中心にお話を伺った。佐須奈小中学校は、対馬の最北端に近い西海岸に位置する、対馬市で唯一の小中併設校である。佐須奈小中学校には、現在、小学生が 55 人、中学生が 24 人いるという。今年の 1 年生が 5 人しかいないため、第 2 学年に進級するときには、一番難しいと言われる第 2、第 3 学年での複式学級（第 3 学年には社会科・理科があるが第 2 学年にはなく、第 2 学年は生活科、3 年生は総合的な学習の時間があるため）になる可能性が高く、2013 年には隣接する佐護地区の佐護小中学校と統合したが、統合後も生徒の減少は進んでいるように思われる。

先に述べたように、佐須奈小中学校は、対馬で唯一の小中併設校である。その利点として、「教育指導の連結のしやすさや、主に小学生にとって中学生が身近にあることなどが挙げられる」と佐須奈小中学校の先生方はおっしゃっていた。具体的にいうと、中学校の英語教員が、小学校の英語の授業を行ってくれたり、中学校の美術の先生が、小学校の図工を教えてくれたりするなど、特別授業が可能になる。このことは、小学生にとって、学習に対する興味関心が刺激されるのではないかと思った。

①佐須奈地区と佐護地区の関係

佐護小学校は、2013 年に廃校となり、佐須奈小中学校に統合された。佐護地区から通っている生徒は、スクールバスを利用し登校しているという。佐護地区では、佐護小学校が佐須奈小中学校に統合された後も、佐護地区の育成会は存在しているという。また、それぞれの地域で大切にしている行事があり、現在では、それらを佐須奈・佐護の両地区が協力しながら行なっているという。例えば、毎年 1 月に佐護地区で行われている「きっしょう焼き」というお祭りに、佐須奈地区の子どもたちも、準備作業からお祭り当日まで一緒に参加するという。また、佐須奈地区では、8 月 24 日に「地蔵祭り」というお祭りがあり、それに佐護の子どもたちが参加しているという。

②佐須奈小中学校の総合的な学習の時間

冒頭で述べたように、佐須奈小中学校では、小学校第3学年から中学校第3学年まで、総合的な学習の時間に「ふるさと学習」を行なっている。「ふるさと学習」はESDとの親和性が非常に強く、直接的に関わりがある。

それぞれの学年には「ふるさと学習」を行う上でテーマが設けられており、今年度のテーマは以下のようになっているようだ。

- ・小学校第3学年 「地域の良さを発見しよう」
- ・小学校第4学年 「対馬の魅力を体験しよう」
- ・小学校第5学年 「対馬の魅力を発見しよう～われら佐護米、ツシマヤマネコの魅力を伝え隊！～」
- ・小学校第6学年 「対馬・自分『未来プロジェクト』」

また、中学生になると、「ふるさと学習」に「Tsushima-Life Balance～対馬と自分の人生、両方の将来を描こう～」という大テーマが設けられている。学年ごとのテーマは以下の通りである。

- ・中学校第1学年 「地域の魅力に触れる」
- ・中学校第2学年 「地域の魅力を磨く」
- ・中学校第3学年 「地域をデザインする」

このようにテーマが決まっていることによって、生徒の目的意識がはっきりするだけでなく、先生方にとっても、カリキュラムを作る上での助けになるのではないかと感じた。

さらに、佐須奈小中学校では総合的な学習に限らず、国語、理科、社会などの教科にも「ふるさと学習」やESDの要素を散りばめている。例えば、小学校第6学年の社会の授業で朝鮮通信使について学習したり、中学校第2学年の国語の授業では方言と共通語について学習したりすることが挙げられる。長田校長は、地域について学習する「ふるさと学習」は、総合的な学習の時間を軸にしながら、様々な教科に要素を組み入れることが重要だと考えているという。

今回は、小学校第4学年の「ふるさと学習」を具体的にお話ししてくださった。今年度、佐須奈小学校第4学年は、「対馬の魅力を体験しよう」というテーマのもと、ツシマウラボシシジミについての学習をしたという。その学習では、ウラボシシジミを育てて守るという地域の人々が行なっている活動に参加し、ウラボシシジミの保全活動に主体的に取り組んでいる対馬市文化交流・自然共生課の方やもやいの会の方とも交流したそうだ。長田校長は、「実際に現地に足を運び、活動への参加や地域の人々との交流を通して、自分たちの地域の自然を守ろうという意識が育ってくれば」とおっしゃっていた。

4. 仁田小学校でのESDの教育実践

仁田小学校では、教員22年目であり、現在、九州大学大学院工学研究院環境社会部門生態工学の博士課程後期に在学しておられる畑島英史先生に、仁田小学校でのESDの教育実践についてのお話を伺った。

①仁田小学校について

仁田小学校は、対馬の上島のほぼ中央に位置する上県町にある小学校だ。2002年には、同じ上県町の町立伊奈小学校を統合した。現在、仁田小学校の全校生徒は53人であり、第2、第3学

年だけが複式学級だという。仁田小学校の子どもたちは、どんなことにも意欲的に取り組むことができる」と畑島先生はおっしゃっていた。

②仁田小学校の第2、第3学年のESDの教育実践

仁田小学校では、畑島先生が担任をされている第2、第3学年で行われているESDについて具体的にお話ししてくださった。畑島先生は、これまで、高学年を担当することが多かったが、仁田小学校に赴任して、第2、第3学年の担任になったため、低学年向けのESDを考える必要があったという。そこで、今年度のテーマになったのが「耕作放棄地問題」だ。農業のことについて次世代を担う子どもたちと一緒に考えられる方法はないか、という校区の瀬田地区からの相談を受け、増加する耕作放棄地の問題をテーマにすることにしたという。対馬のみならず、日本全国の耕作放棄地は年々増加傾向にあり、平成27年では、42万3千haにもものぼる。第2、第3学年は、耕作放棄地の問題を解決するために持続可能な農業を目指そう、という目標を掲げ、耕作放棄地を畑にする、という活動を行うことになった。子どもたちは、毎週2時間程度耕作放棄地を訪れ、地域の方と協力して農地にする作業を行なっているという。畑島先生は、「耕作放棄地が農地に生まれ変わる過程を、子どもたちに1から10まで全て経験させたい」とおっしゃっていた。具体的に子どもたちは、草刈り後の運搬作業から石を取り除く作業、ビニールの設置、苗植え、支柱の設置など、全ての作業を行なったようだ。また、子どもたちが育てているのは、トウモロコシとトマト、子どもたちの家に余り物の種があればその野菜（実際にオクラやインゲンなどの野菜が集まったという）、また「仁田芋」という里芋の一種で地域の伝統野菜等だ。子どもたちはそれらの野菜を育てて、最終的には育てた野菜で、カレーやミネストローネを作りたいと考えているそうだ。対馬のほとんどの地域でサツマイモが栽培されているが、仁田では仁田芋（里芋）が栽培されている。では、なぜ仁田ではサツマイモではなく里芋が栽培されているのかという理由も、今後は子どもたちに調べて欲しいと畑島先生は考えているという。さらに畑島先生は、畑を作る活動を続けながら、河川管理財団から補助金を得て河川教育も進めたいと考えているという。その理由は、洪水を防ぐために仁田の河口は切り開かれており、そのため井戸水が塩に侵され、畑の水にはダムからの水が使われ、ダムの止水により仁田には松藻などの水草が激減してしまった、という背景があるからだ。畑島先生は、「畑を作る活動をするだけでなく、自分たちが作っている畑に関連した問題などにも目を向けるような、より発展した学びに結びつけることが重要だ」とおっしゃっていた。

③ESDの目的

畑島先生は、ESDにおいて大切なことやESDを行う目的、また、ESDの重要性について教えてくださった。まずESDで大切なことは、今ある問題や課題と子どもたちの主体性を結びつけることだ。仁田小学校の例でいうと、地域側から農業のことについて総合的な学習の時間で扱ってほしいということと、増加する耕作放棄地という問題を、地域の人々との図られた出会いで、子どもたちの興味関心に結びつけた。畑島先生は、「上から降りてきたことを押し付けるのではなく、子どもたちの主体性とうまく結びつけることが大切だ。」また、「ESDは『地域知の再構築』が大きな目的であり、例えば、町歩きをした際に『スイカズラ』という花を子どもたちが見つけたというが、ただ単に『スイカズラがある』ということだけでなく『スイカズラの蜜は甘い』ということを知ることが地域知の再構築だ」とおっしゃっていた。日本学術会議では「地域知」は、

専門知と経験値を合わせたものだ」と定義されているという。畑島先生は今後の課題として、地域知を突き詰めていきたいとおっしゃっていた。

5. まとめ

対馬はウラボシシジミやツシマヤマネコをはじめ、その地域特有の生態系や人々の生活がより顕著に残っており、まさに「ふるさと学習」に適した地だと感じた。私の出身地も対馬のように自然が豊かだが、対馬のように「ふるさと学習」を行っていなかったために、地域の特徴をよく知ることができず、その魅力も見逃していたかもしれない。絶滅危惧種であるツシマヤマネコやウラボシシジミの保護活動はもちろん、対馬では減農薬でお米が栽培できない状況であることや、アユの個体数が減少していることなど、地域に探究すべき課題がたくさんあることは「ふるさと学習」の充実に繋がっているのではないだろうか。

さらに、自然環境だけでなく、日本本土よりも韓国に近い「国境の島」ということも、対馬の大きな特徴であり、「ふるさと学習」のテーマの一つだということがわかった。日本は韓国との間に、竹島問題や慰安婦問題など、様々な問題を抱えていることも事実だが、それは国と国との問題であって、個人の問題として持ち出すことは良いことではないと私は考えている。対馬には、韓国語を学んだり、実際に韓国に行き勉強したりしている子どもたちや、対馬に来て日本の学校に通っている韓国の子どもたちがいるということを、今回のアクションリサーチで初めて知った。小さい頃から異文化に触れ、お互いの国について理解することは、従来通りの教育のみを受けている子どもたちにとっては難しいことだと思う。しかし、持続可能な社会の実現には、まさにお互いを理解することが不可欠だ。対馬の子どもたちは、異文化に触れる機会が身近にあり、長田校長先生がおっしゃっていたように、グローバルな学習ができる環境にあるといえる。また、地域の人たちが子どもたちの学習に協力的だということも、学習の充実に繋がっているといえる。仁田小学校での事例のように、ある程度時間にゆとりのある地域の方々が、子どもたちの学習に参加してくださることで、文献ではわからない歴史的なことなどを、体験談としてお話ししてくださる機会にもなりうる。そのような機会は、些細であるけれどもとても重要だ。

また、地域と学校の繋がりの強さは子どもたちの学習に、とても影響を与えるのではないかと考えた。対馬の「ふるさと学習」は、地域を知ることが持続可能な社会の構築に繋がっているというところに特徴がある。佐須奈小中学校で行なっているウラボシシジミの保全活動や、仁田小学校で行なっている耕作放棄地の再生など、地域の問題を解決すると同時に持続可能な社会の構築に結びついており、子どもたちが地域について深く知ることができる。「ふるさと学習」と「ESD」が相互に作用しながら、本当の意味で役に立つ教育が行われていると感じた。

私は初めて対馬を訪れて、様々な経験をする事ができた。それらは「机に向かって行う勉強」や「講義の聴講」だけでは得難いものばかりだった。例えば、地域住民の声を実際に聞いたり、海で釣りをし釣った魚をさばいて食べたり、子どもたちと触れ合ったりすることだ。

今回の合宿で様々な方にインタビューすることで、小学校が廃校になってしまったことによる地域住民の思いや小学校、中学校の先生方が考える対馬でのESDの重要性、高校を卒業すると同時に対馬を出て行く生徒への先生方の想いなど、生の声を聞くことができたことは、私にとって非常に貴重な経験になった。

特にお世話になった農林漁家民宿の平山美登さんをはじめ、小学校が廃校になったことに関する佐護地区でのヒアリングは印象深い。それは、私が通った小学校も廃校しており、学校と地

域との関係について改めて理解することができたからだろう。私は生徒という立場から学校がなくなって悲しい、としか考えたことがなかったが、地域の人々にとっても同様に学校という存在は重要だったのだと知った。おそらく、私の親や地元の人々も、学校がなくなったことに対して佐護地区の方々と同じような思いをしているのではないかと、保護者や地域住民の立場から照らし合わせて考えることができ、とても新鮮だった。また、対馬の子どもたちとのふれあいは忘れることのできない思い出。「ウラボシジミの保護活動」では対馬高校のユネスコスクール部の生徒たちと一緒に活動し、東京のことや受験勉強のこと、対馬のことなどを話した。私の班の女子生徒二人は、高校を卒業したら島外に行くと言っていたが、対馬での生活の中で得た知識や自然に対する感覚などを忘れないでいてほしいと感じた。「ふるさと学習」のような地域との関わりがある学習が、小学校や中学校に比べて少なくなってしまう高校だが、部活動という授業以外での活動を通して対馬の自然を学ぶことは、学校の授業で行う「ふるさと学習」とは内容も異なるので、違う角度から対馬を捉え直すという意味でも、とても重要なことだと思う。

また、「夏休み子ども寺子屋」での活動も心に残っている。対馬の小学生の元気なパワーに圧倒されながらも、勉強を教えたり鬼ごっこをしたり、レクリエーションをして、子どもたちと絆を深め、最後にさよならするのが寂しいと言ってもらえた時には、とても嬉しかった。私は年下の兄弟がいないこともあり、あまり年下の子どもたちと関わったことがなかった。しかし、対馬での子どもたちとの活動を通して、子どもたちと関わることの楽しさを味わうことができた。これから子どもと関わるボランティアをぜひやってみたいと思った。

対馬での経験の全てが、新鮮で輝いているものだった。人口減少も著しい島かもしれないが、独自の生態系を持っていることや「国境の島」であることなど、対馬の魅力をもっと多くの人を知ってもらいたいと感じた。これから対馬高校のユネスコスクール部の生徒たちと一緒に、ウラボシジミの保護活動の一環であるクラウドファンディングに挑戦していくことを楽しみにしている。

【参考文献】

文部科学省，2013，「学習指導要領における ESD 関連記述」（2018 年 9 月 4 日アクセス）。

「ESD 人材育成事業研修会 『ESD 教育実践発表』～小中併設校としての実践～ 対馬市立佐須奈小中学校」アクションリサーチ合宿 3 日目配布資料，2018。

内閣府，2016，「農地・耕作放棄地面積の推移」（2018 年 9 月 25 日アクセス）。

（まつもと・わかこ 立教大学社会学部現代文化学科 2 年 阿部治ゼミ）